

まどの柳枝たれて

とほき牧場の牛のこゑ

近き林の鳥の歌

昔のよそひ引きかへて

やつれしきぬをまとへども

いとし子いだくわが妻の

おもわにみてもゑみの色

われはやぶれぬ人の世の

あらさはげしきたいかひに

されども得たりこの里に

清き平和となぐさめを

## 海

七つ八つの海士の子が

濱の眞砂にいけほりて

堤きづきて水ためて

遊びながらのひとり言

小花 清泉

『大きくなれよ強くなれ

大きくならば我も亦

海原とほくこぎいでて

わまたの松魚つりあげじ』

磯邊の小松とし毎に

春のみどりの色かへで

大きくなると諸共に

彼も大きくなりにけり

かれの望はとげられて

今日のりぞめの松魚船

武士の子の初陣うぶきんに

いでたつがごと勇ましや

右に左に四人づつ

八人の人のこぎゆけば

舳先にさはるものもなし

山なす波も波ならで

「心して行けさらばよ」と

いひて別れて見送りて

母はかくこそ思ひけれ

『あの子生れし年の夏

今日のごとくに船出して

行へ知れずの身となりし

あの子の父に似たるかな

日笠かぶれるあの姿』

小さき魚

日ごろへだてぬ

したしき友に

星かげあはき

ともに涼しき

す み

まなび舎の

誘はれて

夕暮を

小川べり

れ

むかふの岸に

波のまに〜

ちよろ〜と

群れてゐる

つみなさき魚を

おどろかす

青葉のかぜも

おかしけり

徒然草を讀みて

あ ふ ひ

並岡の法師のつれづれの心やりに書きつけいん、徒然草こそ、いとたふときふみなれ。そのはじめは、人に見せんとての料にはあらざりけめど、學力ある人の、世を憤り志を述べたるにて、文さへいと妙なれば、おのづから世にもはやされ、後の世の人、つれづれなるをり、聞あるはさらぬをりにも讀みあぢはひてめで來つるなり。隨筆物としては枕草子につき、註釋の多きことは、源氏物語につぐといふ。

此法師は、大織冠より十九世の後、吉田兼顯の子にして、はじめは兼好として後宇多院北面の土にして、左兵衛佐なりしが、院崩御の後、やがて遁世して兼好法師と呼べり。歌の口つきいとめでたく、二條家の門弟にて四天王と呼ばれたりとぞ。出家して後は、並岡にも住み、また伊賀國見山にもかくれけるとかや。家集に、並岡に無常所まうけてかたはらに櫻をうまさせて「ちきりおく花とならひの岡の邊にあはれいくよの春をすくさん」と、あるを見れば、庵のほとりに櫻などうまてたのしまれたるなるべし。後村上天皇正平五年に、年六十八にて身まかられたるよし諸書に見ゆ。